

本川智紀 (MOTOKAWA Tomonori, ph. D.)

ポーラ化成工業株式会社 上級主任研究員

- 1998年 筑波大学大学院 医科学研究科 修了
- 2008年 博士(理学)(筑波大学)
- 2008年~京都大学霊長類研究所特別利用研究員
- 2010年 第一回日本色素細胞学会奨励賞受賞
- 2010年~MC1R 遺伝子とガンとの関連性解析国際プロジェクト M-SKIP (15カ国 38機関)に企業から唯一の参加
- 日本人のルーツとシミに関する研究を国立科学博物館と開始(趣味の研究として)
- 2012年 国際化粧品技術者会にて最優秀ポスターアワード受賞
- アメリカ色素細胞学会にてポスター賞受賞
- 2013年 財団法人日本粧業会 業界発展功労者表彰
- 2015年 日本人のルーツとシミに関する研究発表



まず、この略歴をみてたくさんの方が浮かぶに違いありません。そもそも生命環境科学研究所の原稿なのにも関わらず、私はここを卒業していないことに気付くでしょう。なんのことはありません、私は他大学から医科学研究科(現:人間総合科学研究所)に入学したのですが、配属された研究室がたまたま生命環境系のライオン丸こと林純一先生の研究室だったのです。配属されたというのはちょっと言い過ぎで、実際は第一、二希望の研究室には入室できず林純一先生のお情けにより拾って頂きました、というのが本当のところ(笑)。残念ながらそんな先生に対して、学生時代には恩返しできるような成果は全く出すことはできませんでした。今回は、その罪滅ぼしの一つとしてこの原稿を書いています。

現在私は、化粧品メーカーでヒトの皮膚に関する研究を行っています。いわゆる美白と呼ばれる分野が私のフィールドです。そこではシミができる仕組みや肌色ができる仕組みを遺伝子工学的、細胞生物学的アプローチで解明しつつ、その知見を活用した素材の開発を行っています。また、開発した素材を化粧品処方化の専門家や商品開発部隊とともに化粧品へと展開していきます。化粧品が完成したからといって、これで終わりではありません。この化粧品の素晴らしさを研究者がきちんと伝えていくことも重要です。例えば、新商品の記者発表会、取材への対応、時にはTV番組の出演なども行うこともあります。この

ように研究の遂行だけでなく、様々な種類の仕事を通じてとても変化があるエキサイティングな日々を送っています。

また仕事と並行して趣味の研究も行ってきました。それは上記の研究の中で我々が見出した日本人の「シミになりやすくなる遺伝子」が、日本人の祖先の一つである縄文人が保有していたのではないか・・・という仮説の研究です。実はこの研究、10年ほど前から休日を使用し実験をしながら進めてきた研究ですが、最近では国内外の研究者のサポートを頂く事により一気に研究が進み、大変面白い結果が出つつあります。こちらでもエキサイティングな日々を送っています。

さて、この私の状況を見て皆さんはどう感じましたか？変わった人・・・？面白そう・・・？

私はみなさんに3つのメッセージを伝えたいと思い上記の文章を書きました。

それは、

①「研究の素晴らしさを伝えるまでが研究だ」

どんなにいい研究でも伝わらないと意味がありません。私達が開発した商品の素晴らしさを自らが伝えていくように、研究者はその素晴らしさを伝えていくことが重要です。ぜひ研究者を目指す皆さんはコミュニケーション力・伝える力も鍛えてください。

②「自分のやりたいことをつらぬけば道が開ける」

普通の人が趣味で日本人のルーツに関する研究というもの通常できません。しかし強い意志を持って努力を続けていくと、道が開ける場合があります。私はそうでした。皆さんもやりたいことがあると思います。今は不可能かもしれませんが、今できる事をやり続けてください。

そして、③「今いい状態でなくても、後で状況はかわるかも」を最後に送ります。

学生時代は全く優秀ではなくダメな私でしたが（笑）、現在は楽しくやっています。今、大変でダメな状態でも人生なにが起こるかわかりません。10年後にはいいことがあることを想像しつつ、その大変さも楽しんでください。

皆さんの人生に幸あれ！

社会に出てから開花する才能

生命環境系 林 純一

後輩の卒業研究発表の会場に、「スーツ」を着た本川がやって来た。おっと思ったが確かこの日はポーラ化粧品の最終面接なのでスーツ姿だったのだ。それにもかかわらず彼は後輩のために律儀に会場にやってきた。ところが横目で見ると何とネクタイがピンクと白のストライプだった。発表が終わったらすぐに注意しようと思ったのだが、発表の途中で出て行ってしまった。しかし最終的にはポーラ化粧品に就職が決まったので余計なことをしなくて良かったと思ったものである。

彼の場合、学生時代に現在の活躍を彷彿させる片鱗があったのかと言うと、まったく思い当たる節がない。あえて言えば、彼が大学院受験の際、第一志望に選んだ教員は、その後も精力的に世界から注目をされる研究をしている有名な研究者で、そういう意味では人を見る目があったと言えなくはない。ただ、不本意であったはずの第三希望の林研究室でもいじけることなく、明るく、セミナーではわかったようなことを言ってお茶を濁し、飲み会とカラオケでは大活躍して、あわだだしく社会に羽ばたいて行ったのである。

その後ポーラ化粧品で行った研究で2本の原著論文を執筆し、生命環境科学研究科で見事博士号（論文博士）を取得した。しかし、彼が化けたのはその後であった。われわれの研究室の卒業生の中で、彼ほど学生時代の成果と社会に出てからの成果に落差のある人間はいないのではないだろうか。自分が楽しいと思うことをとことん楽しむことの延長として、それを会社が評価してくれるのであればそれ以上のことはない。教育者として何もしてやれなかったが、少なくとも彼の飛躍の邪魔をしなくて良かったと今さらながら思うのである。

後日、彼から聞いた話であるが、あのピンクと白のネクタイは、最終面接のときに社長から「君はおしゃれだねえ」と褒められたそうである。